

毎日子育ての事を考えると暗くなる
現在育児で悩んでいることがあれば具体的ご記入下さい。

次ページからのアンケートは1歳から3歳までの発達についての質問項目が
なっています。途中までしかできていなくても全く心配ありませんので○か×
を選んでご記入下さるようお願いします。

表3 KIDS式乳幼児発達スケール

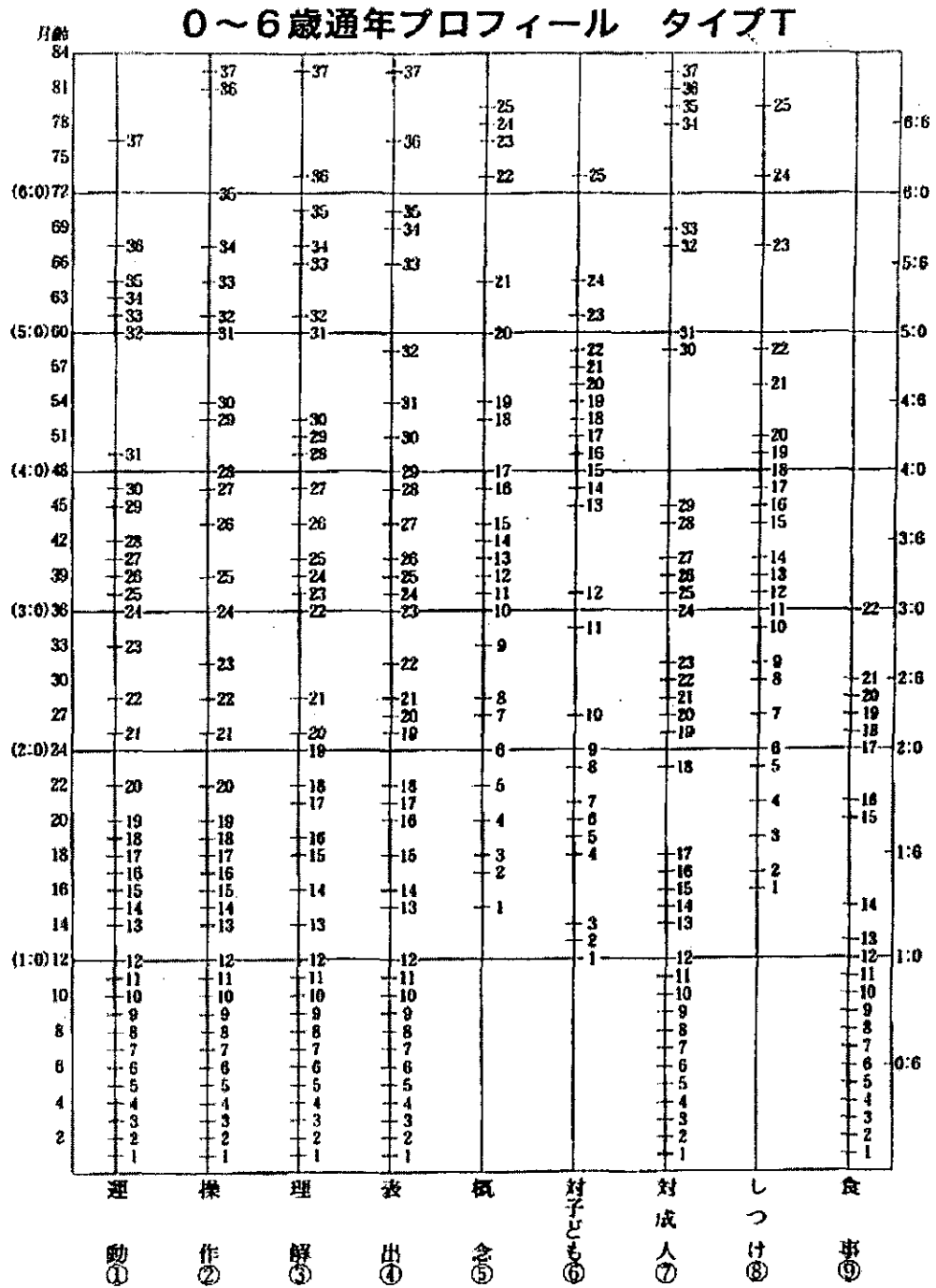
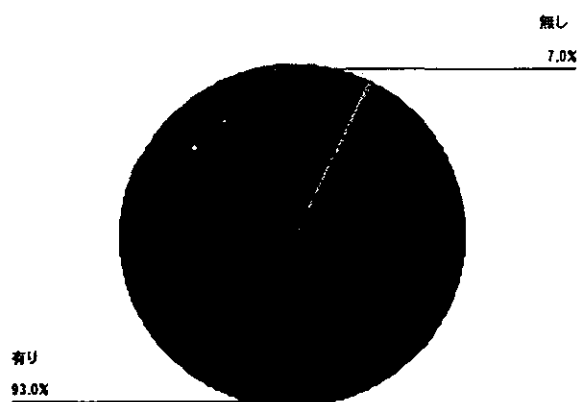
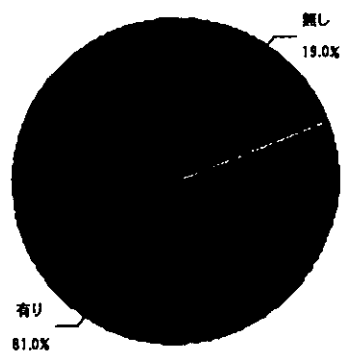


図1 プレネイタルビジット施行例と二歳児のかかりつけ医

プレネイタルビジット有り



プレネイタルビジット無し



二歳時の育児満足と一ヶ月時のエジンバラ鬱指数

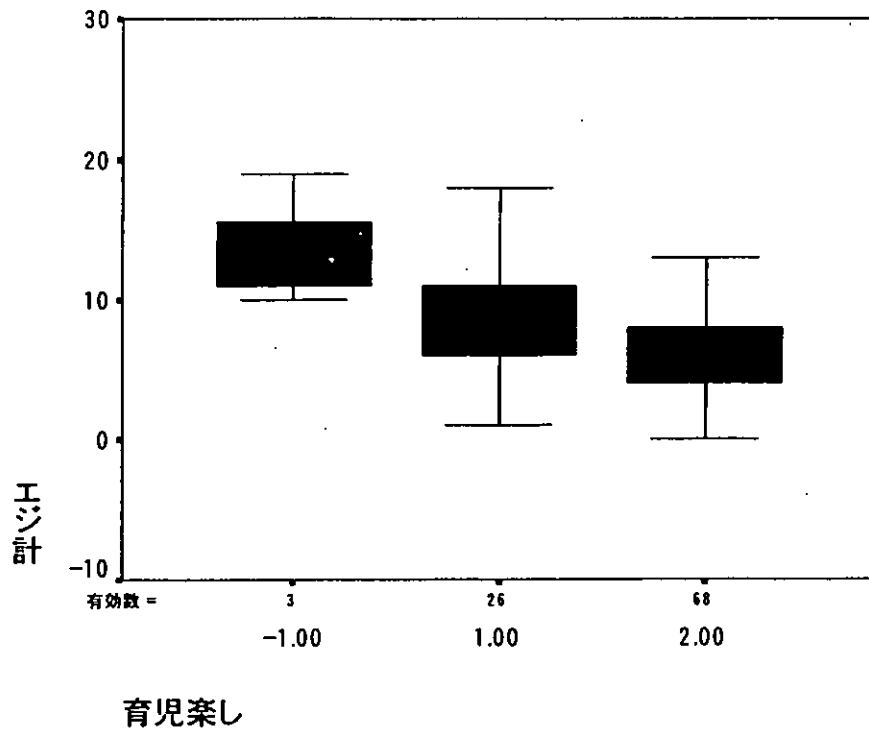


図2 エジンバラ鬱指数と母乳保育

$R = -0.282, p < 0.01$

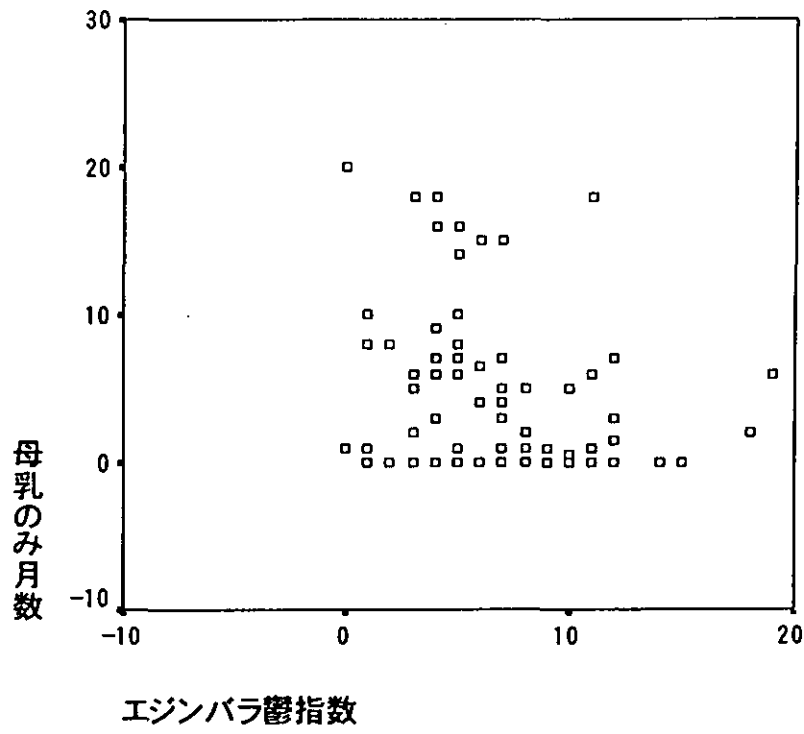
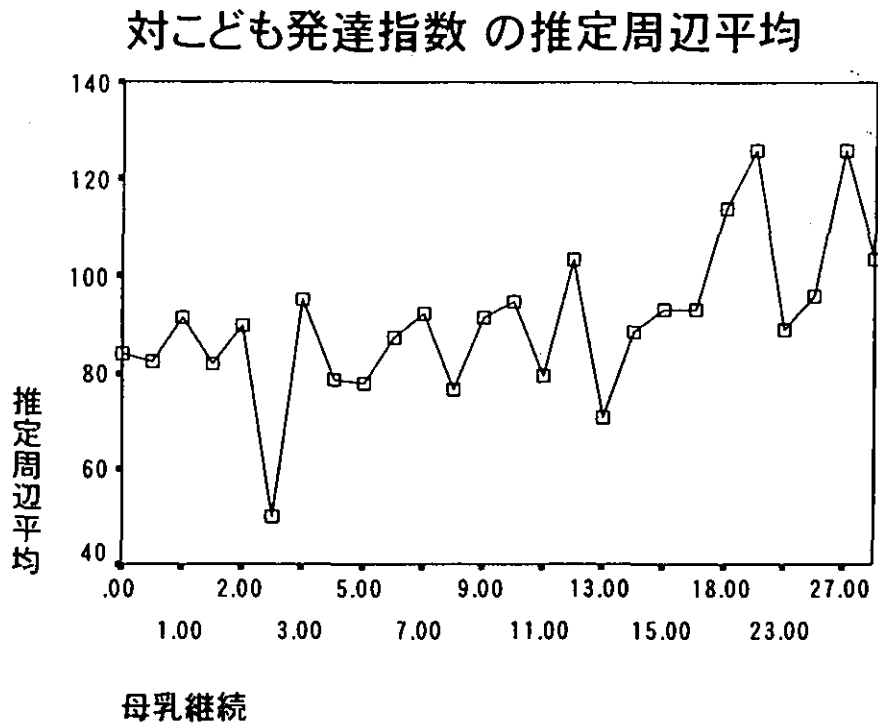


図3 対子ども発達指数と母乳継続



相関係数(全症例)

		母乳のみの 月数	母乳継続 月数	エジンバラ 鬱指数	母児愛着 指数	保育所入 所
母乳のみの月数	Pearson の相関 係数	1	.654(**)	-.282(**)	.056	.028
	有意確率 (両 側)		.000	.006	.698	.761
	N	119	115	95	50	119
母乳継続月数	Pearson の相関 係数	.654(**)	1	-.201	.118	.105
	有意確率 (両 側)	.000		.052	.405	.257
	N	115	118	94	52	118
エジンバラ鬱指 数	Pearson の相関 係数	-.282(**)	-.201	1	-.326(*)	-.138
	有意確率 (両 側)	.006	.052		.033	.179
	N	95	94	97	43	97
母児愛着指数	Pearson の相関 係数	.056	.118	-.326(*)	1	-.241
	有意確率 (両 側)	.698	.405	.033		.082
	N	50	52	43	53	53
修正運動発達指 数	Pearson の相関 係数	.054	-.015	-.078	-.055	.069
	有意確率 (両 側)	.559	.869	.449	.695	.447
	N	119	118	97	53	122
修正操作発達指 数	Pearson の相関 係数	.091	.069	-.018	-.105	.186(*)
	有意確率 (両 側)	.325	.455	.859	.456	.040
	N	119	118	97	53	122
修正理解発達指 数	Pearson の相関 係数	.217(*)	.181(*)	-.163	.133	.039

	有意確率 (両側)	.018	.050	.112	.342	.667
	N	119	118	97	53	122
修正表出發達指数	Pearson の相関係数	.202(*)	.159	-.012	.100	.212(*)
	有意確率 (両側)	.028	.087	.908	.482	.020
	N	118	117	96	52	121
修正概念發達指数	Pearson の相関係数	.094	-.033	-.151	.240	.117
	有意確率 (両側)	.309	.724	.139	.084	.201
	N	119	118	97	53	122
修正対子ども發達指数	Pearson の相関係数	.213(*)	.284(**)	-.073	-.035	.447(**)
	有意確率 (両側)	.020	.002	.480	.805	.000
	N	118	117	96	53	121
修正対成人發達指数	Pearson の相関係数	.166	.257(**)	-.068	-.209	.114
	有意確率 (両側)	.072	.005	.512	.133	.214
	N	118	117	96	53	121
修正しつけ發達指数	Pearson の相関係数	.112	.069	-.060	.089	.254(**)
	有意確率 (両側)	.226	.463	.559	.527	.005
	N	118	117	96	53	121
修正食事發達指数	Pearson の相関係数	.146	.012	.144	.051	.081
	有意確率 (両側)	.116	.901	.165	.720	.377
	N	117	116	95	52	120

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

相関係数(保育所入園なしの群)

		母乳のみの 月数	母乳継続 月数	エジンバラ 鬱指数	母児愛着 指数
母乳のみの月数	Pearson の相関 係数	1	.699(**)	-.318(**)	.011
	有意確率 (両 側)		.000	.008	.948
	N	87	83	69	40
母乳継続月数	Pearson の相関 係数	.699(**)	1	-.338(**)	-.031
	有意確率 (両 側)	.000		.005	.847
	N	83	86	68	42
エジンバラ 鬱指数	Pearson の相関 係数	-.318(**)	-.338(**)	1	-.343
	有意確率 (両 側)	.008	.005		.051
	N	69	68	71	33
母児愛着指数	Pearson の相関 係数	.011	-.031	-.343	1
	有意確率 (両 側)	.948	.847	.051	
	N	40	42	33	43
修正運動 発達指数	Pearson の相関 係数	-.039	.001	-.107	-.021
	有意確率 (両 側)	.717	.994	.374	.893
	N	87	86	71	43
修正操作発達指 数	Pearson の相関 係数	.039	.034	-.059	.107
	有意確率 (両 側)	.720	.755	.625	.495
	N	87	86	71	43
修正理解発達指 数	Pearson の相関 係数	.206	.188	-.206	.209

	有意確率 (両側)	.056	.082	.085	.178
	N	87	86	71	43
修正表出発達指数	Pearson の相関係数	.248(*)	.160	-.045	.150
	有意確率 (両側)	.021	.144	.711	.342
	N	86	85	70	42
修正概念発達指数	Pearson の相関係数	.090	-.059	-.177	.475(**)
	有意確率 (両側)	.406	.587	.140	.001
	N	87	86	71	43
修正対子ども発達指数	Pearson の相関係数	.236(*)	.176	-.228	.085
	有意確率 (両側)	.029	.107	.057	.589
	N	86	85	70	43
修正対成人発達指数	Pearson の相関係数	.120	.226(*)	-.152	-.136
	有意確率 (両側)	.270	.037	.210	.385
	N	86	85	70	43
修正しつけ発達指数	Pearson の相関係数	.135	.059	-.108	.099
	有意確率 (両側)	.216	.594	.375	.528
	N	86	85	70	43
修正食事発達指数	Pearson の相関係数	.135	-.007	.011	.293
	有意確率 (両側)	.218	.948	.926	.060
	N	85	84	69	42

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

相関係数(保育所入園あり)

		母乳のみ	母乳継続	エジ計	問母計
母乳のみ	Pearson の相関係数	1	.559(**)	-.172	.139
	有意確率 (両側)	.	.001	.401	.702
	N	32	32	26	10
母乳継続	Pearson の相関係数	.559(**)	1	.096	.435
	有意確率 (両側)	.001	.	.640	.209
	N	32	32	26	10
エジ計	Pearson の相関係数	-.172	.096	1	-.370
	有意確率 (両側)	.401	.640	.	.293
	N	26	26	26	10
問母計	Pearson の相関係数	.139	.435	-.370	1
	有意確率 (両側)	.702	.209	.293	.
	N	10	10	10	10
修正運動	Pearson の相関係数	.310	-.071	.048	-.157
	有意確率 (両側)	.084	.701	.817	.665
	N	32	32	26	10
修正操作	Pearson の相関係数	.235	.093	.166	-.562
	有意確率 (両側)	.195	.612	.418	.091
	N	32	32	26	10
修正理解	Pearson の相関係数	.258	.155	-.029	.021
	有意確率 (両側)	.154	.396	.887	.955

	側)				
	N	32	32	26	10
修正表出	Pearson の相関	.026	.092	.167	.090
	係数				
	有意確率 (両側)	.890	.618	.416	.805
	N	32	32	26	10
修正概念	Pearson の相関	.094	-.014	-.002	-.340
	係数				
	有意確率 (両側)	.608	.937	.992	.337
	N	32	32	26	10
修正対子	Pearson の相関	.170	.459(**)	.528(**)	-.266
	係数				
	有意確率 (両側)	.351	.008	.006	.457
	N	32	32	26	10
修正対成	Pearson の相関	.301	.304	.169	-.374
	係数				
	有意確率 (両側)	.094	.091	.409	.287
	N	32	32	26	10
修正しつ	Pearson の相関	.030	.011	.190	.216
	係数				
	有意確率 (両側)	.870	.951	.353	.550
	N	32	32	26	10
修正食事	Pearson の相関	.175	.026	.471(*)	-.405
	係数				
	有意確率 (両側)	.339	.888	.015	.245
	N	32	32	26	10

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

「若年女性の育児に対する意識調査」

東北公益文科大学 益邑千草

少子化社会での子育ての諸問題、特に育児不安の軽減のため、妊娠前の、更に結婚前の女性に対していかなる働きかけをすればよいのであろうか。若い女性の子育てに関する意識調査を実施した。

1 調査対象者と調査実施時期

対象者は表1のとおりである。実施時期は、平成15年7月から16年1月である。

表1 調査対象者

学校	学科・専攻	学年	所在地	男	女	計
普通科・						
高等学校	情報ビジネス科	1～3年生全クラス	山形県酒田市	27	630	657
大学	公益学科	1年生特定講義受講者	山形県酒田市	112	57	169
専門学校	看護学科	2年生	東京都世田谷区	6	24	30
社会福祉学科						
短期大学	児童福祉学専攻	2年生	埼玉県春日部市	2	74	76

2 調査方法

調査は、無記名・自記式アンケートで、原則として教室内で、クラス担任教諭または授業担当講師、もしくは研究者本人の立ち会いの下で実施した。

用紙は個別の封筒に入れ、密封状態で回収し、プライバシーの保護に留意した。ただし、自分の意志で開封のまま提出した場合は、そのまま分析した。封筒は更にクラス毎の回収用封筒に入れて回収した。（後述のように個別封筒での回収はプライバシーが保護されるという安心感だけでなく、より自由な記載を促す効果もあったようである。）資料1は、回収用の封筒である。

3 調査内容

調査用紙は、B5版8頁からなる冊子形式で、諮問項目は6頁にわたり、7問からなる。選択肢から答えを選ぶものと、自由記載欄を設けたものを組み合わせた（資料2）。

4 調査結果について

調査結果については、高等学校、大学、専門学校については基本的な分析がほぼ終わっている。

ここでは、高等学校の結果について報告する（資料3）。

1) 調査対象校について

調査の実施に協力を得たのは、山形県酒田市立中央高等学校である。

山形県は全国平均と比較しても3世代同居率が高いが、酒田市を含めて都市部は核家族化が進み同居率が下がる傾向にある。高校は庄内平野の酒田市の中央部に位置し、酒田港にも近く、海山を望む自然に恵まれた環境にある。高等女学校を前身とする女子校であったが、平成6年に普通科に加えて、情報ビジネス科を設置して男子学生を受け入れ、平成13年には普通科も男女共学となった。現在1年生は5クラス、2・3年生は6クラスで、各学年1クラスが情報

ビジネス科、他が普通科である。調査実施時の在籍者は、男子27名、女子630名、計657名である。

教育課程（カリキュラム）は入学年度により異なるが、調査の時点で、調査内容との関連が考えられる科目は、養護教諭の指摘によると、「家庭看護」と「保育」である。普通科の3コースのうちの1コースの学生は、2年生で「家庭看護」、3年生で「保育」の科目があり、調査の実施時期（12月）までに修了している。後述のようにこれらの科目の履修の前後の学年では、アンケート結果に若干影響が見られる。

学生の62.4%が酒田市内の中学の出身である。卒業生の進路について（平成14年度）は、普通科は進学63.4%、就職27.8%、情報ビジネス科は進学34.2%、就職52.6%であった。進学先のうち、専修・各種学校では看護・准看・医療36名、教育・福祉14名などとなっている。

2) アンケートの分析について（概要）

資料3は、分析結果の基礎データである。

○アンケート回答者と、分析対象者について

アンケートは、全17クラスでホームルームの時間に、担任教諭の立ち会いの下で、無記名・自記式アンケートを実施し、個別に密封封筒で回収した。

調査当日の出席者624人全員の回答を得た。

用紙の印刷に不備のあった場合は、交換できるよう予備の用紙も用意してあったが、申し出がなかったため、回収後1名について、印刷不備のため分析不能であることが判明した。この1名を除き、また男子は別に分析することとして、600名について結果を検討した。

○性別と年齢構成（問4の1）・2))

分析対象者について（女子600名、以下同じ）は、15歳から19歳で、平均年齢は16.8歳であった。

<1> 家族の状況と乳幼児とのふれあい

○きょうだいの人数（問1の1))

自分を含めた同胞は平均2.5人であった。半数が2人きょうだいで、3人が4割、一人っ子は4%、4人が4%、5人も1.5%あった。

○同居している家族の人数（問1の2))

同居している家族の人数は平均5.1人であり、5人家族と6人家族で半数を占めている。7人以上が16.8%である。

○乳幼児とふれ合う機会について（問1の3）・4))

同居している家族の中に、就学前の乳幼児がいる人は3.8%で、そのほとんどはきょうだいの数が多い家庭であった。

家族だけでなく、「親戚・近所の人・友人・知人など身近な人」まで拡げて、「就学前の乳幼児を育てている人がいますか」と問うと、65%が「はい」と答えた。どこまでを身近というのか曖昧な問いではあるが、乳幼児とふれ合う機会が決して多くはないという実状がわかる。

○乳幼児とふれ合う機会を求めるかどうかについて（問1の5）・6))

「乳幼児とふれ合う機会が、今より多くある方がいいと思いますか」という問いには、64.

5%が「はい」と答えた。

そのうち、あるといいと思う機会を選ぶ問いでは「土曜日や夏休みなど学校の休日にボランティア活動として、保育園などで保育の手伝いをする」を挙げた人が、4割強を占めた。1)～3)の選択肢には課外の活動を挙げたが、4)の自由記載欄に「学校行事として保育園などで保育の手伝いをする」など、授業時間内に機会を設けるべきなどの意見もあった。

<2>育児体験と生育歴について

○哺乳瓶でミルクを飲ませる(問2の1))

赤ちゃんに哺乳瓶でミルクを飲ませたことがある人は4割弱であった。

1年生が35.6%、3年生が34.7%であるのに対し、3年生が46.4%であるのは保育実習の体験が影響している可能性がある。

○おむつを換える(問2の2))

赤ちゃんのおむつを換えたことがあるかどうかについては、4人に1人が経験があると答えている。3年生が29.0%と最も高いが大きな差ではない。

○幼い子どもに排便・排尿をさせる(問2の3))

おまるやトイレで、幼い子どもに排便・排尿をさせたことがあるかどうかの問いには、同様に4人に1人が経験があると答えている。

○一人で乳幼児の世話をする(問2の4))

上記のような具体的な子どもの世話に加えて、遊び相手をしたとか、危険がないよう見守っていたなども含めて、広い意味での子どもの世話について、「一人で乳幼児の世話を何時間かしたことがありますか」とたずねたところ、約3割があると答えた。

○自分の母子手帳を見たことがある(問2の5))

「自分の母子手帳(母子健康手帳)を見せてもらったことがありますか。」という問いには7割強があると答えている。養護教諭によると自分の健康管理のために予防接種歴の確認などを促すこともあり、関心が高いのではないかと考えられる。

○誕生時の状況を親からきいたことがある(問2の6))

「自分が生まれたときのようすを両親(もしくは祖父母など世話をしてくれた人)にきいたことがありますか」と問うと、8割強があると答えている。

○子育ての苦労話を親からきいたことがある(問2の7))

「子育ての苦労話を両親(もしくは祖父母など世話をしてくれた人)にきいたことがありますか」には、約65%があると答えている。

()内には、夜泣きをした、ミルクを飲まなかった、バンドエイドが嫌いだったなど、さまざまな内容が書かれていた。『苦労話』はきかなかった。『育てやすい子だった』そうだ」とあり、必ずしも苦労話とは限らないという指摘もあった。

○自分自身の育てられ方について(問2の7))

「できればこんなふうに育ててほしかったと思うことはありますか」という問いに対しては、約2割がはいと答え、いいえが約7割で、記入なしが比較的多く1割あった。ここまでの1)～7)は、記入なしが約4%だったのに比べると、判断に迷うことであったのかもしれない。

○こんなふうに育ててほしかったこと(問2の8))

「できればこんなふう育ててほしかったと思うこと」の具体的な内容は、早期からおけいごとをやらせてほしかったなどの要望ととらえたもの、かわいい子に産んでほしかったなどの親の努力だけでは解決できそうもないことが多く見られた。

一方では、「親の接し方が悪い」「もっとかまってほしかった」「ほっといてほしかった」など、現在はどうか、今からでも親子関係を調整しておいた方がよいのではないかと思われるものも多くあり、特にコミュニケーションにかかわる問題が中心にあるのではないかと思われた。また、体罰を示唆するものもあり、中には深刻なものも見られた。

<3>家庭についてのイメージについて

○家庭についてのイメージ (問3の1))

家庭のイメージについてどんなイメージを持っているのかをたずねた。多い順に、

- 2) 安心できる 77.2% 4) 休養できる 73.8% 1) あたたかい 70.7%
9) にぎやか 59.5% 6) いろいろ話せる 55.2% 17) いごちがよく、いつまでもいることができるところ 49.8% 18) いつかは巣立って、去っていくところ 39.3%
14) 疲れがとれる 36.8%

の8項目は、3割以上の学生が○をつけていた。

これらは、いわゆる「肯定的な」語句といえるであろう。

「肯定的」「否定的」という一元的な見方をするのは避けなければならないが、ここに掲げた選択肢の中で、敢えて否定的な語句に分類できるものを挙げてみると、

5) 緊張する、7) つまらない、11) しんとしている、12) 冷たい、13) 疲れるなどが当てはまると考えられる。

ただし、「しんとしている」は単に留守がちの家かもしれない。「疲れる」は家事や自営業が忙しいなど、身体的な疲れが主であったり、容易にとれる疲れの場合もあるであろう。現に(13)「疲れる」と、14)「疲れがとれる」の両方に○をつけた人も少なくなかった。

これらの項目は、「疲れる」の10.7%を除くと、いずれも一桁台である。しかし、これらの項目を2つ3つ、中には4つ選んでいる人もある。5, 7, 12, 13, 18の5つを選び、次の2)の問いに「今の生活と正反対」と書いた学生もいた。これは実際に家庭で過剰のストレスを感じ、一種のSOSを出している状態と考えられ、対応に

また、19)「その他」に○をつけた人はいろいろ具体的に書いてあった。「楽しい」「信頼できる」「元気になる」などのことば、「学校とは違う意味での学習の場」などのユニークな表現で家庭を語る人も多い反面、「ストレスが溜まる」「あまり自分の話をきいてもらえない」などの不満を訴える人も多い。

○築きたい家庭のイメージ (問3の2))

「いつか自分の家庭をつくるとしたら、どんな家庭をつくりたいですか。自由に想像してみてください。(家族構成や、日々の様子など)」の自由記載欄には、ほとんどの学生が具体的な記述をしていた。例えば、家族構成は「夫と自分と、子どもは4人で男女女男の順」とか、夫の職業は「スポーツ選手がいい」とか「休日には家族で旅行に行く」「友達みたいな親子」など。

「明るい」「仲がよい」などのいわゆる肯定的な表現の他、「今の家庭とは違う雰囲気」「ストレスで人に当たったりしない」など現在の家庭に対して批判的なもの、「内職をしなくていい」など経済的な問題や「絶対同居しない」「長女だから別居は難しいかもしれないが・・・」など

将来にわたる家族のあり方を日頃から真剣に考えている様子が窺える。

<4>結婚と出産について

○性別と年齢構成（問4の1）・2))

上記のとおり、分析対象者である女子600名については、15歳から19歳で、平均年齢は16.8歳であった。

○既婚かどうかについて（問4の3))

分析対象者は全員「結婚していない」と答えていた。従って、問4の4)と5)は省略する。

○結婚するつもりかどうかについて（問4の6))

「将来、結婚するつもりですか」という問いと次の「もし結婚したら、子どもはほしいですか」という問いは、簡単なようでむずかしい質問である。即答できる人もあれば、そんなに簡単にきかないでほしいという人もあるであろう。

懸念を抱きながら、アンケートの中程に組んでみたが、まじめに答えてくれたようである。

「将来、結婚するつもりですか」に対しては、学年により差があるが、「はい」が約3分の2あり、「わからない」が3割弱であった。「いいえ」が全体の3.7%である。

この数字をどう評価するかはむずかしいが、まじめに選択肢を選んだ結果のように思われる。

○子どもがほしいかどうかについて（問4の7))

結婚するかどうかに対して、「いいえ」と答えた人を除いて、つまり「はい」と答えた人だけでなく、「わからない」と答えた人も含めて、「もし結婚したら、子どもはほしいですか」とたずねたところ、「ほしい」が約8割であった。

結婚するかどうかは相手もあることであるし、不確定要素が多いから「する」かどうかは今の段階では何ともいえないが、「もし」結婚したら子どもはほしいという人が多いわけである。

「わからない」という人は約1割、「ほしいとは思わない」人が3.5%であった。

<5>子どもの発達について

子どもの発達について、どれくらい把握しているのでしょうか。適切な時期を4つの選択肢から選ぶ質問を設けた。やや質問が曖昧で、回答に苦労したらしく、何度も消して選び直したり、選択肢と選択肢のちょうど中間点に苦渋の○を書いたりしており、真剣に悩んだ様子がうかがえた。質問の出し方を反省し、今後の調査に反映したい。

なお、前述のように、一部のコースの学生は、2年生で「家庭看護」、3年生で「保育」の科目を受講しており、これらの科目の履修の前後の学年ではアンケート結果に若干影響が見られる。

○おっぱい（母乳）を飲まなくなり、哺乳瓶を使わなくなるのは（問5の1))

いわゆる断乳の時期をたずねたものであるが、「1歳6ヵ月ごろ」と答えたのは約54%で、これについては学年が上がるほど率が高くなっている。「生後6ヵ月ごろ」と答えた3割弱の学生は、最近「断乳」といわずに「離乳」というようになったことから離乳食の開始時期を考えていたのかもしれない。全く哺乳瓶を使わなくなる時期が遅い子もいるので、「3歳ごろ」と答えた1割強の学生は自分がそうだったときいていたのかもしれない。今後は理由をたずねてみたい。

○転ばずにひとりで歩けるようになるのは（問5の2))

「転ばずにひとりで歩けるようになる」のは「1歳6ヵ月ごろ」と答えた人が約54%で、これは学年によりばらつきがある。独歩の時期をたずねたのだが、質問の「転ばずに」というところがより年長児を想像させ、紛らわしかったのかもしれない。もっとも母子健康手帳は1歳6ヵ月ごろの項目に「ひとりで上手に歩きますか」が入っている。

「3歳ごろ」という答えが約27%であった。「生後8ヵ月ごろ」というのも12%あり、お誕生前に歩く子もいるし、お祝いの行事もあることから紛らわしい質問であったようだ。

○おむつがとれる（いらなくなる）のは（問5の3）

「おむつがとれる」時期は個人差が大きい。自分の小さいときの話もよくきいているのであろうか、「3歳ごろ」という答えが約6割であった。次に多いのは「1歳6ヵ月ごろ」で、4人に1人くらい。立って歩くようになればおむつがいらなくなると思ったのかもしれない。

○マンマ、プーなど、意味のあることばを話すようになるのは（問5の4）

「ことばを話すようになる」のは「1歳6ヵ月ごろ」が5割強であった。

「意味のある」というところがわかりにくかったのであろうか、「生後8ヵ月ごろ」ではまだ喃語で、ウマウマ、プーなどという音を出せたとしても意味を持たせているわけではないのだが、3割近くが「8ヵ月ごろ」を選んでいて、「3歳ごろ」が1割強あるのは、自分自身もことばがゆっくりだったときいている、という場合もあるかもしれない。

<6>少子化の原因について（問6）

「近年、日本では出生数が減少し、年少者が人口に占める割合も低下し続けています。少子化の原因として、考えられることはどんなことですか。自分の考えに近いものには○（いくつでも）、最も近いもの1つには◎をつけてください」

これも答えに悩む質問であったと思われる。このような質問はどうしても選択肢に偏りができ、答えを誘導してしまう可能性がある。偏りを防ごうとして、選択肢を増やしたため、12も短文が並ぶことになった。アンケートとしてはどちらかというところとまずい設定である。ところが、極めてまじめに答えてくれていた。

○も◎もつけなかった人は8人だけで（時間が足りなかったわけではなく問7は答えていた）、○と◎の数の合計1925から、一人当たり約3.3個の印をつけてくれたわけである。中には2個以上◎をつけた学生もいたが、◎だけ1つつけた人、○をつけたあと◎を選ぶのに悩んだらしい人、13）にだけ○をつけて（ ）内に自分の意見を書いてくれた人も数人いて、誠実さを感じた。

◎印では、7）「女性がやりがいのある仕事を持ち、出産や育児は、仕事と両立できることを条件にするようになったから」が群を抜いて多かった。

次いで8）「子育てに費用が、かかりすぎるから（例えば、出産費用・おけいごと・学費など）」、1）「結婚すれば子どもをつくるのがふつうであるという人が減ってきたから」と続く。

○印では同様に、7）に次いで、1）、8）が多く、それに5）が続く。「望ましい子どもに育てるには親が手をかける必要があるので、少人数しか育てられないから」である。

自由記載の欄では、「経済的な問題」の指摘が複数あった。8）に子育て費用を挙げているが、それより以前の生活の維持、住宅事情など鋭い指摘があった。

また、目立ったのは「児童虐待」を挙げた人が多かったことで、子どもを殺してしまうから子どもが少ないと考えていることがわかる。

<7>少子化について、今後の予測と対策（問7）

これも表現に苦慮した質問で、かえってわかりにくい表現になったようである。

○少子化の今後の予測（問7の1）

「今後も少子化が続くと思いますか」については「はい」が約7割、「わからない」が3割であった。「いいえ」も2.3%あり、それぞれ自分なりに考えた上での答えと考えられる。

○少子化対策について（問7の2）

「少子化傾向にブレーキをかけるような対策をとるべきだと思いますか」、曖昧な問いであったため、「対策ってよくわかりませんが」とか、「子どもをたくさん産めばいい」という答えもあった。「はい」が約35%、「わからない」が55%で、高校生としては正直なところではないだろうか。「いいえ」が9.7%、つまり1割近くがはっきりノーといっている。

○少子化対策の内容（問7の3）

「はいと答えた方へどのような対策をとればいいと思いますか。最も重要だと思うものを3つまであげてください」。自由記載の欄には、出産に対して補助金を出すという意味の対策などを自分なりの表現で書いていた。

○「特に詳しく述べたいアイデアや意見があれば、下の欄に自由に書いてください」

ユニークな意見として、「男性も子どもを産めばいい」というのがあった。出産も育児も女性にばかり負担がかかる、男性は楽をしすぎだという意味のことが述べられていた。また、「少子化は何とかしないと日本が滅びてしまう」と書いた人もおり、一方で「少子化は必ず止まる」というコメントもあった。（ ）が並んでいても臆することなく伸び伸びと自分のことばで考えを述べていた。

5 考察

今回の高等学校の調査においては、全体としては、育児に関する知識や問題意識は充分とはいえないまでもある程度は備えていること、未確定の条件が多い高校生の段階でも、自分の将来をかなり具体的に捉えようとしていることがわかった。

結婚や出産、育児を含めて、自分の将来の生活をどのように組み立てていくべきか、それには何が必要かということをも具体的に考えさせるということは、様々な機会や情報が適切に用意されれば、高校生の段階で十分に活用できると思われる。

更には、それ以前の生育状況も影響するため、中学生レベルでも実態を把握すべきであると思われる。今後も若い世代の意識とニーズを詳細に調査し、支援をの具体化していく必要がある。

調査対象となった高等学校には、調査結果の報告の後、学生に小児科医として子育ての話をしてはどうかと考えていた。しかし、個々の調査用紙を読んでもみると、むしろ個別の相談が必要であり、自分の心身の健康も、家族のことも含めて親や担任の教諭とは異なる立場からのきめ細かい支援が求められていると感じている。

小児科医の立場としては、プレネイタルを突き抜けて思春期、思春期も早期から日常的に関わっていく必要性を痛感した。

6 終わりに

今後の取り組みについては、高等学校の調査結果の詳しい分析と、同じ酒田市にある大学の

調査、都市部や他の環境にある学校の学生に対する調査との比較等の解析作業を進める必要がある。

最後になりましたが、この度の調査にご協力くださった酒田市立中央高等学校、酒田市健康福祉部健康課、東北公益文科大学、至誠会看護専門学校、共栄学園短期大学の関係者の方々に感謝いたします。